

R&V

1992年
秋号 10月～12月
第7号

本を読んで

このところ体調がおもわしくなく、何をするにも気力がない。そのような状態の中、何冊かの本を読んだ。山の本が多かったが、自分に強烈な印象を与え、力づけられた本が何冊かあった。松田宏也氏の『ミニヤコンカ奇跡の生還』と、山の本ではないが、佐野三治氏の『たった一人の生還』である。この本をよんだ後、十数年前に読んだP・Pリード氏の『生存者』を本棚から引っ張りだして、もう一度読んだ。

まず『ミニヤコンカ奇跡の生還』である。遭難のきっかけとなったアタックであるが、もっと早く下山を開始していればこのような状態にはならなかったという問題は残るとしても、その後の生きようとする人間の気力というか、本能というか、それである。アタック隊は菅原氏と松田氏の二名であった。二人共、生きようと頑張る。しかし困難な場所を過ぎ、比較的安全地帯にきてから、二人は離ればなれになってしまった。ここで読者の中には、松田氏が菅原氏を見捨てたと思う人がいるかも知れない。事実、私もそう思った。私だったら最後まで二人で頑張ったのではなかったろうかと。でもそれは今現在、平常な生活をしているからそう感じるのであり、生きるか死ぬかの極限状態で両手両足は凍傷で動かず、意識ももうろうとしている状態では、自分の事でいっぱいであり、とても他の人の事など考える余裕はなかったであろう。幸い私は今まで遭難騒ぎを4回起こしているものの、そのような極限状態に陥った事がないのでわからないが、松田氏は何日も何日も着の身着のままでビバークを重ね、ついに生還する。私は自分が松田氏になりきった様な錯覚をおこして、ヤッタ！タスカッタ！と心から喜んだ。

次に、佐野三治氏の『たった一人の生還』であるが、ジャパノグアムヨットレース中、悪天によりヨット（たか号）が転覆、ライフラクトに乗って27日漂流した後、救助されるという記録である。佐野氏は（たか号）に乗ることになったのは出発の直

前であり、いわゆる新参者であったので、いくつかの気になることがあったが、それを口にだすことができなかった。ここで問題となるのは、レースに出るためのヨットの改造作業が出発の前日までかかることである。この余裕のなさが後々に致命的な原因の1つになる。（登山でもそうだ。出発の直前まで準備を怠り、あわただしく出て行った時ほど往々にして忘れ物が多かったり、よしんば無かったとしても敗退が多いものである）。ヨットの転覆後、イーパブ（救難信号発信装置）が作動しなかった。これも出発前に点検をしておけばこんなことにはならなかった。（登山の場合でも出発前の準備を怠った為、コンロの調子が悪く、下山せざるを得なかったという話を耳にしたことがあるが、これも同じ様な理由であろう。）でも、私の脳裏に焼き付いて居るのはこんなことではない。転覆の時1人が水死、残りの6人がライフラクトに乗り込み、27日間に及ぶ漂流生活が始まるのである。食料も水もほとんど無く、体力の無い者から1人死に、2人死にと減っていった。佐野氏は水分を補給しようと、やがて自分の小便まで飲むようになる。そのうち最後の友も亡くなり、1人ぼっちになってしまう。（ここで佐野氏だけ他の5人と違った衣類を着ていたことが目につく。それは、我々が沢登りや雪山に使用しているオーロンやクロロファイバーを着ていたのである。このおかげで体力の消耗をかなり防げたようである。）一人ぼっちになってしまった佐野氏は、孤独と死の恐怖と戦いながら生きる望みを捨てなかった。生きるんだ、生きるんだと自分を励ます。（私の場合だったらどうしただろう。恐らく、寂しさと苦しさに耐えられず、自ら死を選んでいたかもしれない。）本を読んでいてライフラクトが貨物船に発見されたときは、自分が佐野さんになりきっていて、嬉しくて嬉しくて涙が止まらなかった。よく頑張ったと思う。

もう一つのP・Pリード氏の『生存者』であるが、これは21年前、アンデス山中に乗員乗客45人乗せた飛行機が墜落、71日後に16名が救出されるというものである。このニュースは、私もよく覚えている。始め20数名いた生存者も次々と死んでいく。回りは雪と岩の世界で食料も無くなってきた。そこで死んだ人の肉を食べようということになる。始めは人肉を食べることができない人が数名いた。しかしその者達もどんどん衰弱が進み、食べざるを得なくなってくる。だんだんエスカレートし、肝臓、心臓、腸、脳みそ、はては骨髓まで食べる者もでてくる。これは量が少ないからだけではなく、いつも同じ味覚なので違った味覚が欲しくなるからなのである。そのうち割った頭蓋骨を皿の替わりに使う者も出てくる。（これを読んで私は背中に寒気を感じ鳥肌が立った。しかし、よく考えてみると彼らを責めることはできないであろう。

極限状態にたたされた場合、自分はそんなことは絶対にできないとは言い切れないのである。もう普通の精神状態ではないのである。) 彼らは、いろいろな脱出方法を試みるがみつからず、結局2名の者が4100mの山を越して脱出に成功する。なんの登山用具も装備もなく9日間もビバークを重ね下山したのである。遭難以来70日目であった。でも正直のところ前出の2冊の時とは違って涙はでてこなかった。それは人肉食餌ということが頭に引っ掛かっていたからである。16名が救出されたというニュースは全世界の人々を驚かせ、そして喜ばせた。事実その後、人肉食餌が報道されると身内の中にも“死んでくれた方がよかった”などと言い出す者もでてきたのである。人肉食餌のことは別として彼らもよく頑張ったと思う。

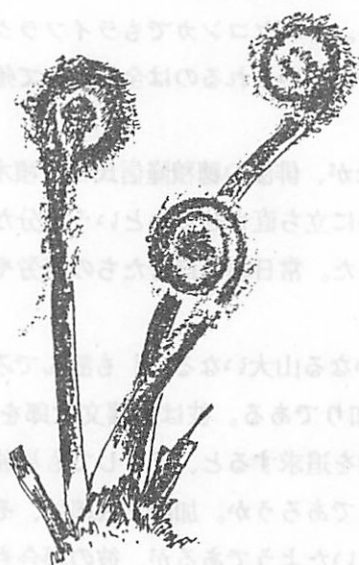
これまでの3冊の中で人間関係についても正直に書かれているが、人間皆、顔形が違うように考え方も違う。その人間たちが長期間、一緒にいると、どうしてもエゴというものが出てきて、つまらない事で言い争いや、もめごとがおきてくる。極限状態に在れば、なおさらであろう。ミニヤコンカでもライフラクトでもアンデスでもそれはあったようだ。それでも一緒にいられるのは全員生きて帰るんだという同じ目的があったからであろう。

ここでちょっと思い出したが、俳優の穂積隆信氏の『積木くずし』も読んだ。これは、非行にはしった娘をいかに立ち直させるかという自分たちの記録である。この年齢になってずいぶん勉強になった。常日頃の自分たちの苦勞や悩みなんて、なんと小さいことであろうか。

最後に志水哲也君の『大いなる山大いなる谷』も読んでみた。彼とは、山で何回か逢ったことがあるので顔見知りである。彼は加藤文太郎を思わせる単独志向者である。よく単独志向者は、困難を追求すると、どうしても単独登攀になってしまうと言う人も居るが、彼もそうなのであろうか。加藤文太郎は、それよりも人間関係の煩わしさを嫌って単独で行動していたようであるが、彼の場合も文面からそういう一面がうかがえる。しかし山に対する情熱は敬服にあたいするものである。1つの目標ができると、わき目もふらずそれに向かって、つき進んでいく。技術もさることながら集中力と精神力は並ではない。私も単独登攀を2度ほどやったことがあるが、これもパートナーが居ないので仕方なくやったものであり、絶対失敗は許されないというプレッシャーに勝つことができず、それ以後やってはいない。志水君の登攀前のプレッシャーによる心の葛藤の様子が伝わってくる。志水君には、次の目標に向かって果敢に挑戦して欲しい。ただしより安全にと言いたい。なぜならば、あの、ものし

ずかで、人あたりがよく、おごりのない好青年を山で失いたくないからである。

(本図一統)



目次

書評会集

1992年 秋号 10月～12月 第7号 ACC-J茨城

本を読んで	・・・	1
集会報告	・・・	6
山行報告	・・・	7
南稜テラスまでの散歩	・・・	8
太刀岡山鉄岩左岩稜	・・・	10
甲州、太刀岡山鉄岩正面壁	・・・	11
ナーゲル祭	・・・	13
明星山と思いきや、小川山 Free Climbing	・・・	15
岩登りトレーニング 御岩山	・・・	19
アァ憧れの富士山	・・・	20
気分はもう冬壁 三つ峠にて	・・・	23
御岩山 岩トレ	・・・	24
白毛門（雪上訓練）	・・・	26
編集後記	・・・	27

集会報告

(於、スカイラーク土浦真鍋店)

水 目

10月14日

出席者 本図、菊地、中居、高田、生井、村上、
佐藤、古山、笹沢、長久保、

10月28日

出席者 本図、村上、高田、佐藤、中居、馬淵、生井、中居

11月11日

出席者 菊地、庄司、所、佐藤、馬淵、高田、中居、村上、古山

11月25日

出席者 高田、原田、菊地、馬淵、長久保、鯉河、本図、古山、
中居、高木

12月 9日

出席者 佐藤、中居、高田、原田、生井、所、馬淵、
本図、菊地、鯉河、笹沢

12月24日

出席者 本図、中居、佐藤、高田、庄司、馬淵、古山、生井、所

山行報告

- | | | |
|------------|-------------------|--|
| 10月 9日 | 松木沢ジャンダルム (岩トレ) | L高田、古山、笹沢、村上、
長久保 |
| | 松木沢中央岩峰凹角ルート | L生井、中居、佐藤 |
| 10月11日 | 谷川岳 (ACC-J東京と飲み会) | L生井、高田、本図、佐藤、
原田、村上、古山、
船崎、名雪、金 |
| 10月18日 | 太刀岡山左岩稜 | L生井、佐藤、古山 |
| | 〃 正面壁 | L本図、高田 |
| 10月24日～25日 | (ナーゲル祭) | L本図、鯉河、佐藤、古山、
中居、原田、笹沢、鈴木、
庄司、生井 |
| 11月1日～3日 | 明星山～小川山 | L本図、高田、生井、古山、
中居、佐藤 |
| 11月8日 | お岩山 (岩トレ) | L高田、生井、長久保、馬淵
古山 |
| 11月15日 | 古河フリークライミング講習会 | L本図、佐藤、高田、古山、
村上、笹沢、中居 |
| 11月22日～23日 | 富士山 | L本図、高田、古山、原田、
佐藤 |
| | 〃 三ツ峠 | L中居、村上 |
| 12月1日 | 古河人工壁 | L中居、笹沢 |
| 12月5日 | お岩山 (岩トレ) | L高田、庄司 |
| 12月13日 | お岩山 (岩トレ) | L本図、笹沢、庄司 |
| 12月20日 | 白毛門 | L所、佐藤、笹沢、庄司、
馬淵 |

南稜テラスまでの散歩

92.10.11

パーティ 生井一男、高田暢年、本図一統、佐藤文則、原田眞由美、村上晴美、
古山正文、船崎、名雪、金

2週間程前、一の倉沢にやってきたときは、ざんざん雨降りであったので、盛大なバーベキューと奈良俣ダム見学、そして、温泉ツアーで休日を過ごしたのであった。本番の岩登りはほとんど始めてであったので、天気が良くなって少しほっとしたのであるが、反面ちょっとだけ残念なような気もしていた。

来年の春までゲレンデでの練習を積み、次のシーズンには登るぞと思っていた南稜であったが、またまた一の倉沢への山行が計画されたので、前回の「ちょっと残念」の余韻を引きずっていた私は、参加することにした。ACCJ（東京）のメンバーも一の倉沢に入っており、前夜は夜更けまでの大宴会となった。

朝、テント周辺の騒がしさに目が覚め、入口から頭を出してみると、カメラの三脚があった。みれば、あたりいっぱいカメラマン達が良いポジションを選んでシャッターチャンスを待っている。一の倉沢の紅葉がとても美しい時期であったのだが、いやはやたいへんな人の群れにびっくりした。それより驚いたことがある。テントから出てみると、私たちのテントの周辺にはコッヘルやら武器やら鍋やら、極め付けは酒の缶や瓶が20本位だったろうか、散乱していたのである。もちろん、アルコールのにおいが漂っている。かたずける気力もなく宴の残骸を眺めていると、近くを通る人々が冷たい視線を投げかける。結局、この後始末は本図さんと原田さんをお願いすることにして、高田、生井、佐藤、古山、村上の5人は南稜目指して出発したのであった。

50mの懸垂下降を終え、水の流れて丸く削られてプールの滑り台のようになっていところを渡ったり、はいつくばったり、騒いだりしながら、なんとかテールリッジの基部までやってきた。ここに至るまでも前夜飲み過ぎたと思われる某氏が吐く場所を探しながら歩くなど、なかなか大変だったのである。さて、これが噂のテールリッジである。ここからザイルをつけることになり、佐藤君がハーケンを一枚打ち込んだ。名前の通り、馬の背のようになってい岩を登っていく。半分登攀が始まった気分になる。テールリッジの途中だったか、上の方だったかにあった木は、懸垂下降の

ためのザイルが繰り返し掛けられたことで、幹の3分の1位が削られてしまっている。一の倉沢の歴史を感じさせられた。途中で某氏の救助用シュリング等を見学しながら、テールリッジを登り終え、軽食をとる。出合の方を見おろすと、車や人々がずいぶん小さく見える。向いの白毛門は堂々として良い山にみえ、是非登ってみたいと思った。衝立岩に登攀中のパーティも数パーティ見えた。いつかは、あんなところに登れるようになるのだろうか？などとはあまり考えなかったが、間近に衝立岩を見たので、すごいところに登るすごい人たちがいるのだなあと改めて感動してしまった。

ここから南稜テラスまでトラバースしてゆく。落石がパラパラあり、なかなか気持ちの良くないところである。南稜テラスに到着し、軽食をとり、さていよいよ南稜に登り始めるぞ、というところなのだが、生井さん曰く「こんなに人が入っているのは見たことがない」というように、登り始めてすぐのところから渋滞しているのである。相談の結果、某初心者（それは私だ）もいることだし、登るには登っても降りてくる頃には暗くなってしまうということで、本日は南稜テラスまでとし、ここから降りることに決定したのである。

こうして、南稜登攀は結局次のシーズンまで持ち越されたわけであるが、素晴らしい天気にも恵まれ、一の倉沢の紅葉を堪能し、体中の筋肉を使って散歩するという、充実した体育の日（10月10日だったのである）を過ごすことができたのである。

（村上 記）



シロザ

太刀岡山鉄岩左岩稜

92.10.18

パーティ L 生井一男、佐藤文則、古山正文

人工登攀を行うことのできるグレンデとして甲府北部の岩場“太刀岡山”に出かけた。生井、佐藤、古山は左岩稜を、本図、高田は正面壁を登る予定である。協同病院駐車場に集合し、本図さんの車で、桜土浦から高速に乗り目的地に向かう。甲府南で高速を降り、市内のコンビニでビールを購入した後、観音峠に向かう途中の最後のバス停前に駐車し、バス停の中にテントを張る。例のごとく、ビールを飲んでから、2時頃シュラフに潜り込む。

翌日、晴。朝食を済ませ、車で少し戻ってから川を渡り、登山道入り口に駐車。ここから、2パーティに分かれ、我々はなぜか藪の中をとおよそ10分ほどで取り付きに着く。左岩稜の取り付け付近はフリー化されていて、“太刀岡山メインエリア”と呼ばれているらしい。その難度は、5.10-5.12である。(情報交換のための太刀岡ノートが置いてあった。)

我々の取り付いたルートは、“カバチ”と呼ばれる5.11aのフリーのルートのすぐ隣の人工のルートである。トップに佐藤君がロープを2本引き、登攀開始。調子よくあぶみを掛け換えながら登っていき、やがて岩壁から姿が見えなくなり、しばらくして合図がある。生井さん、古山の順に登攀開始。古山は人工登攀が初めてなので、生井さんに教えてもらいながら登ってゆくが、なかなか要領がつかめない。登ると言うよりはあぶみとロープにぶら下がってもがいていると言う感じである。あぶみに乗ったときのあぶみの伸びが気持ち悪い。1ピッチの後半は草付きの岩場を木登りで登り、灌木でビレイを取ったポイント着。2ピッチ目は、草付きのバンドを左に大きくトラバースするが、草付きの状態が悪く足元が怪しい。3ピッチ目の出だしは、人工のルートと左に回ったフリールートがあり、佐藤君は人工のルートを、生井さんはフリーのルートを登る。古山は、生井さんのテープのあぶみを借りて登るが、6ミリロープのあぶみよりテープのあぶみの伸びが少ない分だけ、感じがよいようである。

生井さんは、この辺から“報道カメラマン化”し、8ミリビデオで登攀の様子や風景を撮り始める。最後のピッチは、全部フリーのルートである。本図さんと高田さんがすでに登攀終了し、頂上岩峰（はさみ岩）にいるのが見える。鋭く切れたリッジを

またいで通過し、2時頃終了点到着。登攀具をザックにしまい、全員で登山道を下り約15分ほどで車に戻る。来た道と別のホッチ峠を通り小淵沢インターから高速に乗り、土浦へ戻る。なお、生井さんの撮っていたビデオはナーゲル祭で上映された。

(古山 記)

甲州 太刀岡山鉄岩正面壁

92.10.18

パーティ L 本図一統、高田暢年

太刀岡山は甲府市の北にある山である、最近の岩雪にフリークライミングのルートが紹介されていた。我々が初めてこの山を知ったのはもう何年か前に、本図さんが沢仲間から聞いてきたのがきっかけで、人工のいい練習になるとのことで以前行った事がある。その時は左岩稜を登った。今回は私と本図さんと正面壁、生井さん佐藤そして人工が今回初めてという古山氏で左岩稜を登る事にする。

前夜いつものように協同病院の駐車場集合、ここで私がテントを忘れた事にきずきアパートを経由し現地へ向かう。中央高速を甲府昭和でおり途中コンビニでビールを買い込みいつもの？場所にテントをいざ張ろうとして、ポールを忘れてきたことにきずいたが後の祭り。しかし屋根付きのバス停のような所を利用し何とかテントを張り一杯やって寝ることにする。(古山氏は相変わらず外で寝ていた)

翌朝はゆっくりと起き出す。アプローチが短いルートも3ピッチ位であるし、終了点から一般道で車の所まで15分位であるため、焦る必要はない。

一般道を少し登ると壁の基部に着く、ここで左岩稜のパーティ3名と別れ我々は正面壁の取りつきへと右へ進む。途中に最近作られたフリーのルートが幾つかありルート図が下がってた。私にはとても登れそうなどこではなさそうだ。更にここより右へと進み適当な所より取りつき直上する。1ピッチフリーで登るとそこからはボルトの連打となり人工登攀となる。壁は垂直でボルトの間隔は近く、しっかりしており快適である。2ピッチ目の終了点は木に取るのだが、ここに移る時が少し嫌らしいが、この上も更に快適な人工登攀が続く。途中上から何かが落下してきて一瞬落石かと、身

を縮めたがそれにしては落下速度が遅いためよく見ると、ムササビであった。初めて実物を見たので感激した。

3ピッチでルートは終了しそのまま頂上に突き上げる。まだ左岩稜パーティは来てなかった、かなり下の方にいるらしく暫くは上がって来そうにない。天気はのどかで暑くも寒くもないため、二人で行動食を食べながら今後の当会の行く末について？（本当は下ネタが殆ど）激論を交わしたのであった。

そうこうしてるうちに、左岩稜パーティがトップ佐藤を先頭に、報道カメラマン生

井さん、平成の加藤文太郎こと古山氏の三名が登ってきた。やはり古山氏が人工が初めてであったため、かなりてこずったようである。

頂上には人工の練習をするのにはもってこいの場所があるのだが、左岩稜パーティが登ってきたのは既に3時を過ぎてたので、下ることにした。

ここは少し遠いのが難点だが、人数が揃えば初心者の方の練習にも最適であるため、この時期にはいい場所であると思う。

（高田 記）



正面壁を登る本図

ナーゲル祭

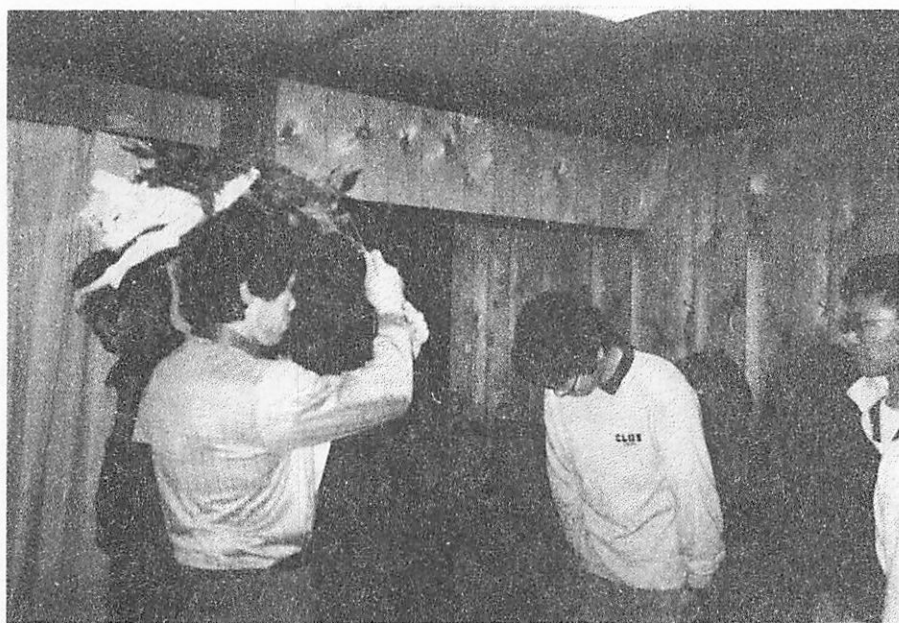
92. 10. 24

パーティ 鈴木操、古山正文、笹沢ひろみ、原田真由美、生井一男、庄司真陸

本図一統、鯉河仁志、所繁、佐藤文則

「おい鯉河！原稿できてっか」集会での変酋長の言葉にこれはマズイ、今日は何と
言い逃れしようかと考えてしまった。実は3カ月前に原稿の依頼を受けていたのだ
が、何の能もない百姓の私にとって原稿を書くことは至難の業なのである。そのよう
な訳でつい遅れてしまういつものパターンに成ってしまった。

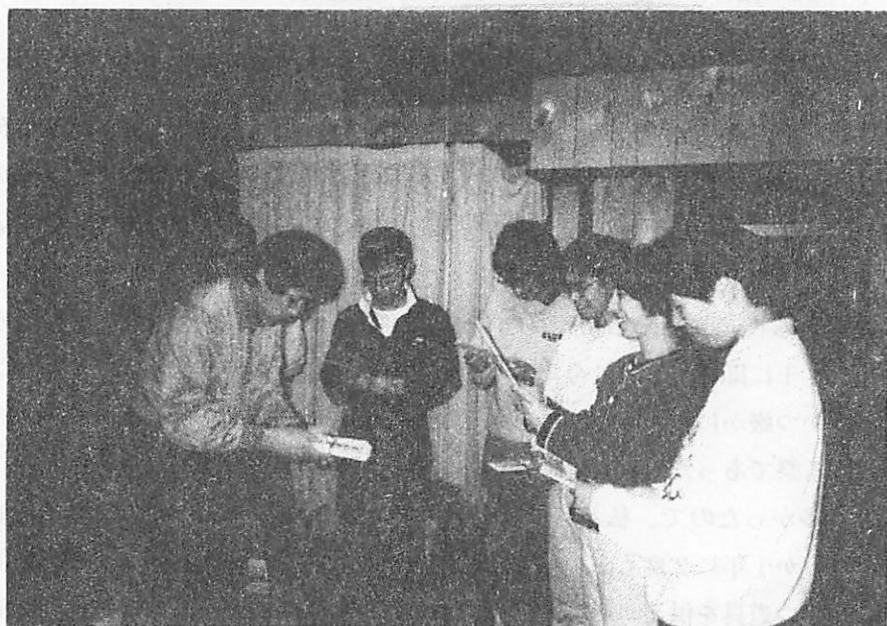
10月のある夜、当会の事務局長の菊地氏より「ナーゲル祭やるから参加しない
か」とのT e lに即OKする。今年のナーゲル祭は岩瀬町のキャンプ場のキャビン
を借りて盛大かつ厳かに行われた。A C C - Jの伝統のナーゲル祭は、1年の山での安
全を祈願する祭であったが、近年は中止の年もあったり、ただの飲み会で終わってし
まうことが多かったので、私としては少々不満であった。このことに山の神様もお
こっていたのか1年に2度も山で転落した者もいた。しかし今年は昔のように、仮の
神前に山の7つ道具を供えニセ神主に祝詞まであげる手のこみように、私も大変満足



神主にお祓いをうける村上

してしまった。きっと山の神様の怒りも納まったのではないかと思います。これからもう年に1度の会の祭として多くのOBにも参加してもらい盛大に行いたいと思う。

(鯉河 記)



神主にお札をいただく



宴会風景

明星山と思いきや、小川山 Free climbing

92. 11. 1~3

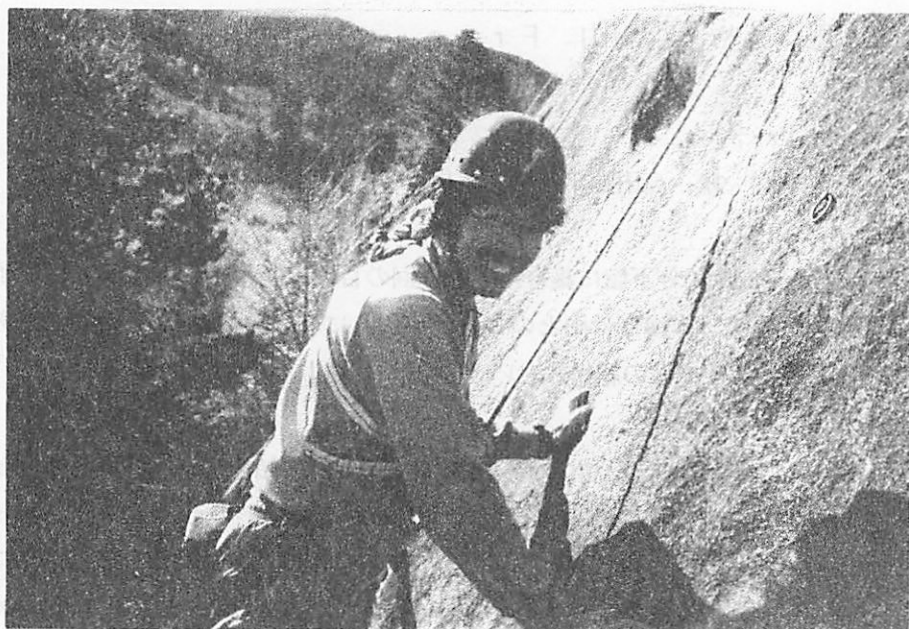
パーティ L本図一統、高田暢年、生井一男、古山正文、佐藤文則、中居康展

10月30日、午後8時50分下館に集合する。今回の目的は明星山であるが、天気予報によれば強い冬型で日本海側は雨とのこと。いずれにせよ11月1~3日の三日間あるし、更には高田さんが先輩の結婚式ということで糸魚川で落ち合うことになっているのでとりあえず出発となった。

関越を越えてしばらくすると雷を伴って激しく雨が降り始めた。こりゃだめだと皆で言いつつ糸魚川まで行ってみると、何と高田さんがいないのだ。まさかと思ったが、高田さんは寝過ごして富山で一夜を明かしたとのこと。翌朝一番の電車で駅に現れた。何はともあれ全員集合ということで明星山まで行ってみる。この時は時々雨も止み、ひょっとしたら明日、明後日にも登れるのではと期待を持たせる。テントを張って軽く酒盛りをし、しばらく天気待ちをしていたがちっとも回復の気配なし。天



ガマスラブを登る佐藤



ガマスラブにて、古山

気予報では明日明後日も冬型で天気は悪いとのこと。雨がやんでもしばらくは登れないだし、それくらいなら後二日残っているんだからどっかに移動した方がいいのではという話が持ち上がり、そこできっと晴れているに違いないと小川山へ移動しようということになった。

明星山から白馬方面にぬけて豊科より中央道にはいり、小淵沢の先八ヶ岳を越したあたりで高速を下りる。もしここでも天気がわるかったら頭にジャンピングで穴を開けるぞなどという不穏な情勢であったため、どぴーかんの天気に一安心。暗くなる頃廻り目平に到着しテントを張る。明日の好天を期待しつつ酒盛りは夜遅くまでつづいた。

さて11月2日である。天気は最高、朝テントから出てみると、なんと今回もと言うべきか古山さんは外で寝ているではないか。このくそ寒いのにと思いつつのんびりと朝食の準備をする。風はないが気温はかなり低く、うだうだしていると出発は9時過ぎになってしまった。最初はガマスラブを登る。下部はフリクションのよく効くやさしいスラブだが、上部はホールドも細かくかなりのバランスクライミングを強いられる。結局上部で詰まり、本図さんにザイルを上から垂らしてもらって登り切った。スラブ自体は比較的様々なルートが可能であり、それぞれ限定ルートなどを登って午前

の部は終了。

午後は対岸のマラ岩にうつる。ここには古山さんのお薦め「カサブランカ 5.10a」がある。いっちょやってみるかとおツプロープをたらす。本図さん、高田さんがチャレンジしている間に、その隣のワイドクラック(5.9)を試してみたがなかなか難しい。一回クライムダウンして再度根性入れて登った。小川山などのクラックルートは皆ナチュラルプロテクションで、ナッツ、フレンズを駆使しないと登れない。自分はこういった登り方が好きだし、今後はこういった手段、アメリカンエイドなどのスタイルで登ることがフリーに限らずアルパインにも要求されることだろう。さ



マラ岩カサブランカを登る本図

てかのカサブランカであるが、結局上部のフレアしたクラックをみんな登れず「いやー10aなんて登れねーよ。」などと言いながら見ていた。結局六人ともここは登れず、気温がずっと低いのもあって本図さん、高田さん、佐藤の三人は買い出しのため下っていった。

残る三人で今度はもっと右手のフェースを登ることにする。生井さんが左上するクラック(5.8)を登り、トツプロープをセットする。古山さんの話によれば5.10a位というフェースを登ったが、これがまた難しいのだ。(衛星軌道とかいう名前のルートだったと思うが。) 70度ほどのスラブに立ちこんで左手の二本指が第一関節まで入るホールドを利用して登るところが核心部なのだが、自分はここでチョンボしてRCCボルトで一休み。その上部は快適な登りであった。さて今度こそはチョンボなしできれいに登るぞと思いつつ再チャレンジしたが、かの核心部がどうしても登れず(結構

惜しいのはあった…下からはがれろーという声援を受けながら…)心残りをつくってしまった。古山さんも生井さんも結局登れず、ちょうど太陽が山に隠れたところでテントにもどった。ここの5.10aは後日登った古河の5.10bより難しいと断言できる。全く5.13とか、14とかを登る連中は本当に人間なのだろうか。この日のビールはやたら効いた。

翌3日、テントから出ると真っ白に霜をかぶったシュラフが横たわっていた。さしもの古山さんもこの寒さで…と一瞬あせったがもぞもぞと動いたので一安心。のんびりと撤収して帰路についた。

こんどはもっと時間をかけて、例えば一週間位滞在してフリークライミングを楽しみたいものと思ったが、果たしてこのACCJ茨城にフリーは根づくだろうか。今後の動きが気になるところである。

(中居 記)



岩登りトレーニング ー御岩山ー

92.11.8

パーティ L 高田暢年、生井一男、長久保加寿子、馬淵勝則、古山正文

今回は、岩登り技術の習得及び向上のため日立の御岩山へ出かけた。長久保、馬淵両名は高田さんとフリーの練習、私は生井さんとあぶみの練習である。

前夜、協同病院駐車場に集合し、高田さんの車で出発、途中馬淵君を拾う。登山道入り口の駐車場に車を止め、テントを張っていると雨が降り出してきた。いつものように、テントの中でビールを飲みながら雑談に花を咲かせながら、シュラフの中へ。...

翌朝は、曇ときどき晴ときどき雪がちらつく天気、寒い。岩が昨夜の雨で濡れていて練習できないかも知れないが、とりあえず8時半頃出発する。岩場は乾いていて十分練習可能であった。二手に分かれ、私と生井さんは祠のあるハングした岩場（名前はよく知らない）で練習を始める。生井さんが初めにあぶみの乗り方、移動の仕方などの手本を示しながら、トップロープをセットし、その後私がトライ。巻き込んでの休息の姿勢の取り方や、あぶみの上段での立ち込みなどのコツを教えてもらった。が、要領が悪いとあぶみに乗ったままぐるぐると回ってしまい、爆笑ものである。天気が悪く気温が低く寒いので、なかなか大変であるが、とにかく数回交代で練習する。お昼頃、ご飯にしようとして上まで登ってみると、高田さんらはまだ練習している。様子を見ていると、馬淵君は初めての岩登りにもかかわらずどんどん登っている。岩登りは恐くないそうである。ヘルメットをヤンキーかぶりしているのは長久保さんである。この後、山頂で昼ご飯を一緒に食べながら、午後どうしようという話になったが、天気が悪く寒いので、結局やめにして、土浦へ向かった。

(古山 記)



コウゾリナ

アァ憧れの白い富士山

92. 11. 22 ~ 11. 23

パーティ L 本図一統、高田暢年、原田真由美、古山正文、佐藤文則

そう、あれは2年前のことでした。冬山もろくに知らずに入会した私が、色々な山行の行き帰りの車の中で冬山は怖い、けど登りたい、と話をするたびに冬の富士山に登れば一人前だときかされました。少し冬山も経験した昨年は「富士山」と言う行って来いと言われるもののやっぱり怖くて行けませんでした。

昨年の冬合宿でちょっぴり自信をつけた今年こそは富士山に行きたいと思っていたところ、うれしいことにO、Kとなるどころか、5人もそろっちゃたじゃ亜一理間専科。

さてさて、そんな訳で、経験豊富な本図大明神様をリーダーとして21日夜10時に土浦を出発しました。車内では不安が残る私に追い打ちをかけるように、アイスバーンでつまづいたら終わりだとか、風に吹かれたら飛ばされるだとか、富士山はやっぱり危ないというような話を聞かされながらいつの間にかスバルライン入り口で、今夜はここで寝ようということでビールで乾杯して登山の無事を願ってから寝ました。

朝起きると外は良すぎるほどいい天気で、駐車場には他にも寝ている人が結構いました。ゆっくりと起きだして雪の積もった滝沢林道を登り、佐藤小屋手前に車を止め、登山の準備をして10時05分に出発。今日の目標は八合目付近である。

小屋の辺りはまだ雪で一面真っ白とまではいかなかったが、すぐに雪だらけになった。しかしアイゼンが要るというような事は全くなく登山靴で快適に登る。しっかりと踏み跡に足を合わせ、汗をかきかき登る。いくら11月の富士山とはいえ快晴の今日は目茶苦茶暑い。汗がだらだら流れていく。本図さんの鉢巻きをまねする訳じゃないけれど、タオルを頭に巻く、ただしバンダナのようにかっこよく。(最初は鉢巻きだったけど) そうこうして、6合目、7合目と進んでいくうちに、「あれ、おかしいな」ってかんじで頭痛がしてきた。おいおい本当かよ。前きた時は平気だったじゃないか、なんでいまさら高山病かよ、やめてくれよ、などと考えながらも一步一步と前進する。ここまでのいいペースできたんだから頂上まで行ってしまいたい、と思いつつも体は言うことをきかず、もうへとへとだ。そこで出てくる行動酒。こら

がまた、たまらん。うめえっす。一口のつもりでついついごくんといってしまう。あ～胃が焼ける。

8合目を過ぎてしばらくして、ここから上は頂上までテン場はないだろうという所でビバークとする。8合目の上の方の小屋の屋根の上だ。小屋の影には張れないので、風当たりは強いが仕方ないだろう。ツエルトを2張り張る。我々が張り終わるころ、もう一人単独の人がきてテントを張り始めたが、風に煽られて吹き飛ばされてしまった。テントは瞬く間に吉田大沢を駆け降りて、滑落停止訓練をしている人に止められた。単独の人は気の毒に下に戻るようである。

一方我々とはいうと、中に入って一杯はいれば、そんなことはすっかり忘れていい気分。調子に乗っておいらもお代わりしたのがいけなかった。眠くなるのは当たり前、みんなの声も気持ちよく、そのまま眠りについちゃった。飯を作ると起こされると、見事に気分が悪くなっていた。飯ができて2口しか食べれない。僕ってデリケートなんだなあ。しかしそれでは終わらない。げふっと吐いちゃった（失礼）。本図さんに背中をさすってもらい楽になりました。俺のことを介抱したお陰で本図さんの酔いは醒めたそうです。

朝起きるとやっぱり頭が痛い。これが高山病か、はたまた二日酔いか、上にいっても平気かな、と思いつつ出発。ピッチは上げれないけど前には進める。テン場を出て



富士山9合目を登る原田と本図

すぐは風が強く耐風姿勢が役立った。しかし、その上では風は弱まり、少し楽になった。上は見えている。一步一步進むだけだ。息を思いっきり切らせてゆっくりと登る。ステップはバッチリできている。じわじわ高度を上げついに12時20分頂上だ。風はすごく強い。(T氏がおしっこをしたら、風で全身にひっかかったらしい。) 快晴で三ツ峠がよく見える。寒くて、とてもいられないので写真を撮ってそそくさと下山開始。

ここからが、正念場だ。足を滑らしたら一巻の終わりだ。最初は慎重に下りる。今日は雪が軟らかくて靴がよく食い込む。調子に乗ってスピードを上げる。案外平気だ。さらに調子に乗ってそのままハイスピードで下る。あっという間にデボ地点につき、一息入れてまた出発。7合目辺りから暑くてしょうがなく、ヤッケや帽子を取る。だんだん汗だらだらになりながら下りてくる。下山は本当にあっけなく2時20分にもう佐藤小屋だ。ア～ア疲れた。

11月22日 佐藤小屋(10:05) — 8合上部(14:30)

11月23日 出発(9:30) — 頂上(12:20~12:30)

— 佐藤小屋(14:20)

(佐藤 記)



富士山頂にて、原田、佐藤、本図、古山

気分はもう冬壁 ～三つ峠にて～

92.11.22～23

パーティ L 中居康展、村上晴美

それはちょうど古河で人工壁の講習を受けた日のこと。次の連休の富士山には行きたいが、その三日後には苦手の循環器の追試が待っているのだ。ああどうしよう、いま富士山のような冬山に行くには心の余裕がなさすぎるし、かといってせっかくこの地獄の総括試験19連戦の終わりに山にも行かないのは悔しいし、ということで気分は快適フリークライミングの三つ峠に村上さんの講習も兼ねて行くことになったのでした。

協同病院の駐車場に行くとちょうど富士山に行くメンバーが集まってきており、「いやー富士山の上は寒そうですね、こっちは快適に岩を登ってきますよ。」などと言いながら土浦を出発。中央道を快適に走り河口湖を経て三つ峠の登山口にテントを張って仮眠。明け方はかなり冷え込んだけれど、その前の小川山も同じくらい冷え込んだし、今回も風が無ければ同じように快適なフリーが楽しめるぞ、と思った私が馬鹿でした。途中の登山道は日が当たるとなかなか暖かく富士山も綺麗に見えていたのだけれど、三つ峠山荘の上の広場でさてテントを張るかとしたときには富士山も雲に隠れ、風も強くなって寒いこと寒いこと。とりあえずテントにもぐり込んで暖をとったけれどこの寒さではとても岩登りと言う感じではない。誰か登っている人はいないかと、岩場の取付きまで行ってみると冬壁の練習に来た人達が手袋にアイゼンでガリガリやっているではないか。それに壁自体もつららがいっぱいぶら下がっており、まったく三つ峠は冬壁の様相を呈しているではありませんか。しかしここまできて全く登らないのもしゃくなので風の収まり具合を見て登ろうか、ということにしました。

なんとなく風が収まってきたので、今回は最もメジャーなルートである一般ルートから上部へつなぎ、山頂に行くルートを取ることにしたのですが、かの一般ルートはトップロープで手袋にアイゼンガリガリの人でいっぱい、くそ寒いなかしばらく待つことになりました。本当は確保方法とかザイルワークとかをじっくりコーチしたかったのだけれど、こんな中でのおんびりやっているのは苦痛以外の何者でもないのでもっと登攀開始。けれど村上さんがこういったスタカット登攀に慣れていないうえ

に風が強くて声が届かず、登攀はなかなか順調とはいかず、最後の天狗の踊り場で確保しているときはもう全身ぶるぶる震えながら、まさに「気分はもう冬壁」でした。ザイル、登攀具を片づけて、一応三つ峠というところをスタカットで登ったということだ…などと話しながら山頂を踏み、テントの中へ逃げ込んだのでした。

そのあとはテントの中でお茶でも飲みながら簡単に講習会、というかんじで時間をつぶし、半ば悔し紛れに「きっと富士山も大荒れで酷い目にあってるよ。」などといっておりました。（後日、富士山はど快晴で最高だったと聞いて少々悔しかった。）

翌日、勿論三つ峠は風も強く相変わらずの寒さだったので、文句なく下山決定。河口湖湖畔から眺める富士山はなかなか見事で、さすが日本一の山でした。途中のひどくマイナーな温泉で体を温めて帰路についたのです。まあ、暖かくなったら三つ峠で今度こそ快適なフリークライミングを楽しむこととしましょう。

（中居 記）



御岩山岩トレ

92.12.5

パーティ L 本図一統、笹沢ひろみ、庄司真陸

御岩山へ行く。本図師匠のもと、弟子の笹沢さんと私で今回の題目「アイゼンをつけての岩壁登攀」に挑む。私は、先週も高田さんに御岩山につきあってもらっている。毎回、貴重な時間をさいて教えてくれる諸先輩に深く感謝！しかし、センスのない私は常に期待を裏切り続け、入会して半年経つがまったく上達していない。まあ、これからもマイペースで一生懸命がんばっていこう。

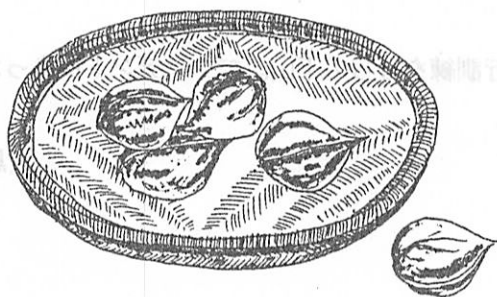
千代田町役場に朝7時に集合。温暖な鹿島からでてきた私にとって、この内陸性気候はつらい。こんな寒冷地に定住している人はえらい！本図さんの運転で、笠間・常北経由し2時間半過ぎで御岩山下に到着。駐車場から岩場まではウォーミングアップにぴったりの小道をすすむ。

午前中は、本図さんにお借りしたクレッターをはいて練習する。クレッターをはくのははじめてである。ずいぶん窮屈なことに驚く。だが、実際に岩にとりついてみると、今まで恐くて体重のをせられなかったデッパリに、足をのせても大丈夫なことがわかる。はきごこちは、スニーカーの圧迫感のなさがなつかしいけど。午前中の練習がおわりクレッターを脱ぐと、足に蓄積された血が爆発したのか、と思ったほど熱くなりそこら中を駆け回った。肝心の登攀はというと、私は笹沢さんよりずっと下手なことがわかった。

午後はアイゼンをつけての訓練。5 mほどの短いところを何回か登り降りする。本番では、岩は凍りつき、視界は悪く、手袋をし、重い荷を背負っていることだろう。実際の登攀で今のようにやれるわけではない。それを念頭において練習する。だからって、本番をうまくきりぬけられるわけではないんだけど。

御岩山、というと会のバリバリの人たちは「あんな簡単な3級ゲレンデ！」とさげすんだ目をしあきらかにバカにしているが（もっともそれだけの実績があり、修羅場をくぐり抜けてきたのだから当然だろう）、私にとっては得るところが多い。今まで数回ひとりて来て、トップロープで練習もしたが、これからはもっと頻繁に来るようにしよう。ベテランの本図さんにとっては退屈な訓練だったろうが、はやく上手になってザイルを組んでもらえるようになりたく思う。

(庄司 記)



クルミ

白毛門（雪上訓練）

92. 12. 20

パーティ L所繁、佐藤文則、笹沢ひろみ、庄司真陸、馬淵勝則

今回が初めての冬山であった。この山行で、ひそかに楽しみにしていたことがあった。ラッセルである。実は、まえまえからこれをして見たいと思っていたのである。登り口から少し歩いた後、早速ラッセルの練習をやった。もちろんワカンをはくのも初めてである。所さんの指導のもと、1歩、2歩と腰まである雪を踏み崩して少しずつ道をのぼしていく。しかし、それにしてもラッセルがこんなに疲れるものとは思わなかった。雪山は寒い所とばかりと思っていたがとんでもない、汗で全身ずぶ濡れである。早速、ラッセルが大嫌いになっている自分に気づきつつ歩をすすめる馬淵であった。

ラッセルの訓練は適当に終わりにし、その後はトレールをただひたすら山頂へと歩いた。途中、事件が起こった。笹沢さんが雪庇を踏み抜いてしまったのである。岩場の端がストンと抜けたという感じで滑ってしまい、笹沢さんは両脇、両腕で地面を抱えている格好でぶら下がっている。一見、平気そうにみえたので、下に足場があって立っているのかと思ったのだがとんでもない勘違いだった。所さんが地面にはいつくばり、手をつかんで何とか確保だけはする。その後、2人で引きずり上げやっと一息ついた。その場に所さんがいて、本当に良かったと思った。自分は冬山初心者である。経験者ですらミスをするのかと思うと正直いってぞっとした。

新調のプラ靴が不調だった佐藤さんを除いて、上り始めて5時間後、4人は頂上に立つことができた。ちなみに私のプラ靴は本図さんのおさがりで履くのは今朝が初めてである。足を真っ赤に腫らした佐藤さんをみて、理由もなく悪いなあと思わないこともない僕でした。

その後、アイゼンの歩行訓練を行って下山。アクシデントはあったが、自分にとって有意義な山行であった。

（馬淵 記）

※ 編集後記

大変なミスをおかしてしまった。生井の提出してくれたウメコバ沢中央岩峰凹角ルートの記事とフロッピーをなくしてしまいました。いくら探しても見つからないのです。生井は、いつも早く提出してくれているので助かっているのですが、なんと謝っていいかわかりません。少し言い訳を言わせていただければ、他の皆さんがもっと早く原稿を提出してくればこんなことには成りませんでした。何しろ、3か月経っても提出しない人がいるのです。なるべく早く出してくださるようお願いします。私も2度とこのようなことのないよう十分注意致します。今後共、御協力のほど宜しくお願い申し上げます。

(音菜台州記)



季報「R&V」第7号 発行1992年 秋

発行者：鯉河仁志

発行所：ACC-J 茨城

〒315-01 茨城県新治郡八郷町柿岡1997

本図一統方

編集者：土度助兵衛 音菜台州記
